金毘羅參詣海陸記

TALL TREE
LIBRARY
Japanese
Maps
1778
4

Konpira Shrine

金毘羅参詣海陸記

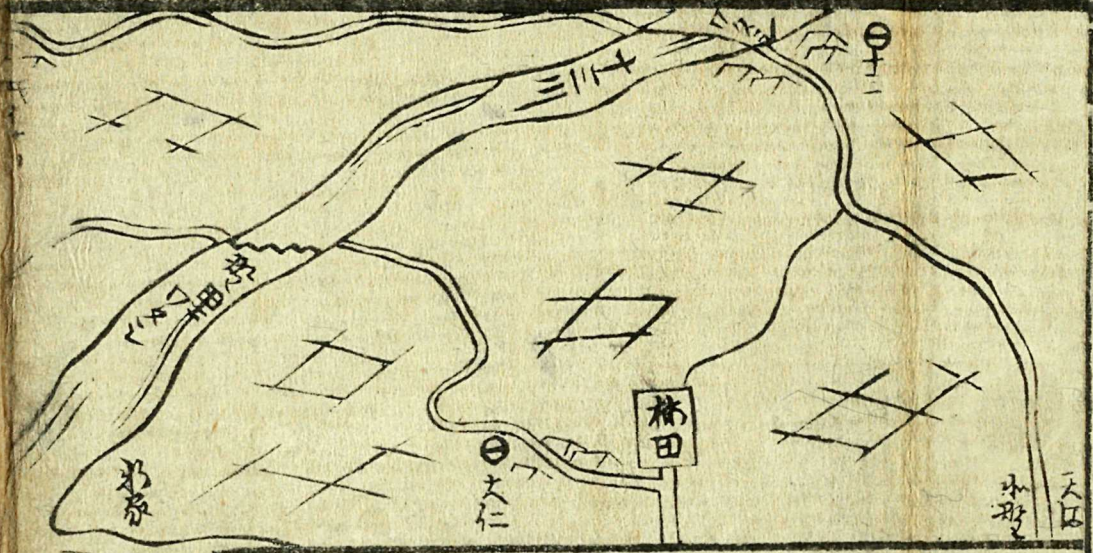
陸地へ揚陸より播磨備前備中路を
歩く四海の下津丹へ出るとこ路程又指
を星ふれる沢く立場茶屋賀茂の浦乃
名所四海又紀路を大坂川にゆう漕波
丸亀ことの海上路程又指三里乃間雲
ぐう湾く沖間ゆ湾く名所往復名
地にいうて金毘羅山海参詣来る項
路の事海西名所四海あと事安事記
但し漕別の名所八家屋海未見あ乃
をあらべ大坂うて家紀の事紀名
和歌して漕見こる私、紀をはけ
さ也百姓百姓ゆ見あしてすぐ
金毘羅、事海とぐし代百姓名
形小巻末小巻安事紀ス下名ゆを
丸亀、出ることの大坂より播別こる
砂土のる播ゆ名所陸地えあて

こゝ船より乗船すれば三里ばかりに金毘羅参詣の人百船ばかりの間ひしめき漕列の中に船を巡りて銭をこゝに投げ巡りて銭を船の加賀ばしを船をかりて陸地すぐよりて大坂の住家地と住家地の境へ●㊀ばのかゝるとゝけてとけたる

●澤へわらぐる

へさまり ㊀小豆島

金毘羅

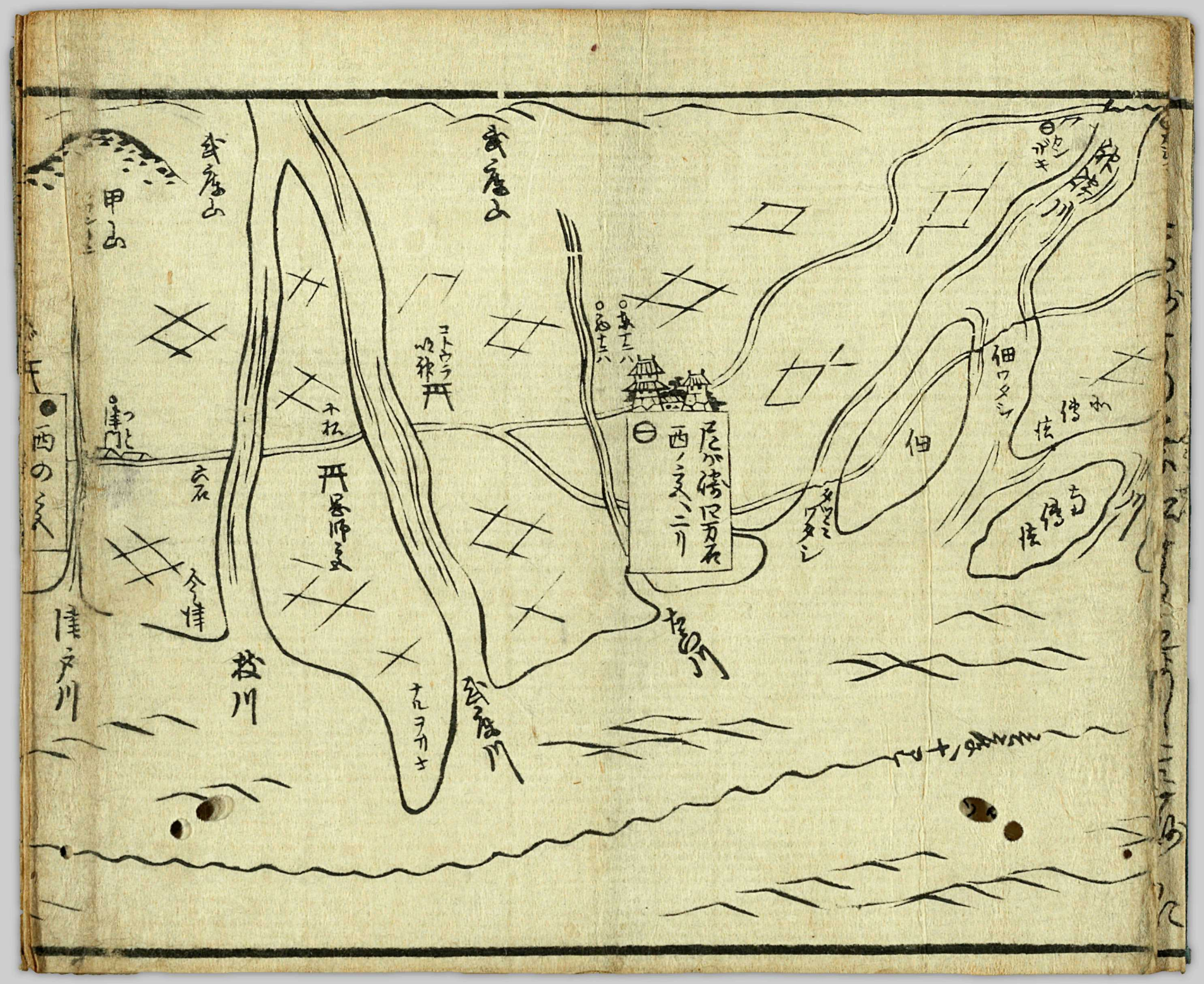


大坂

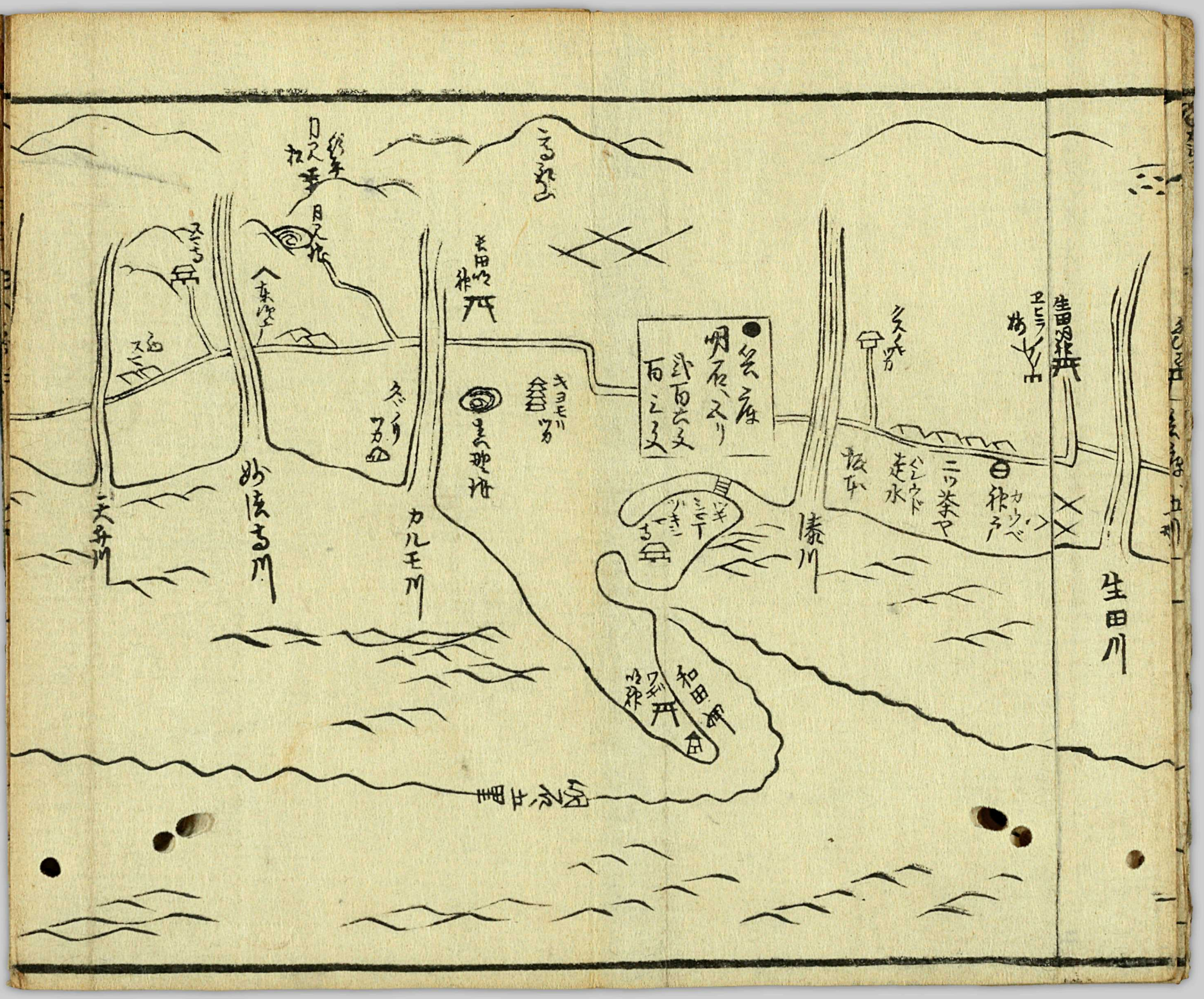
西の天くみ里
外出ちんふ家
凡かるみ百四十八文
人文 弐百七十文

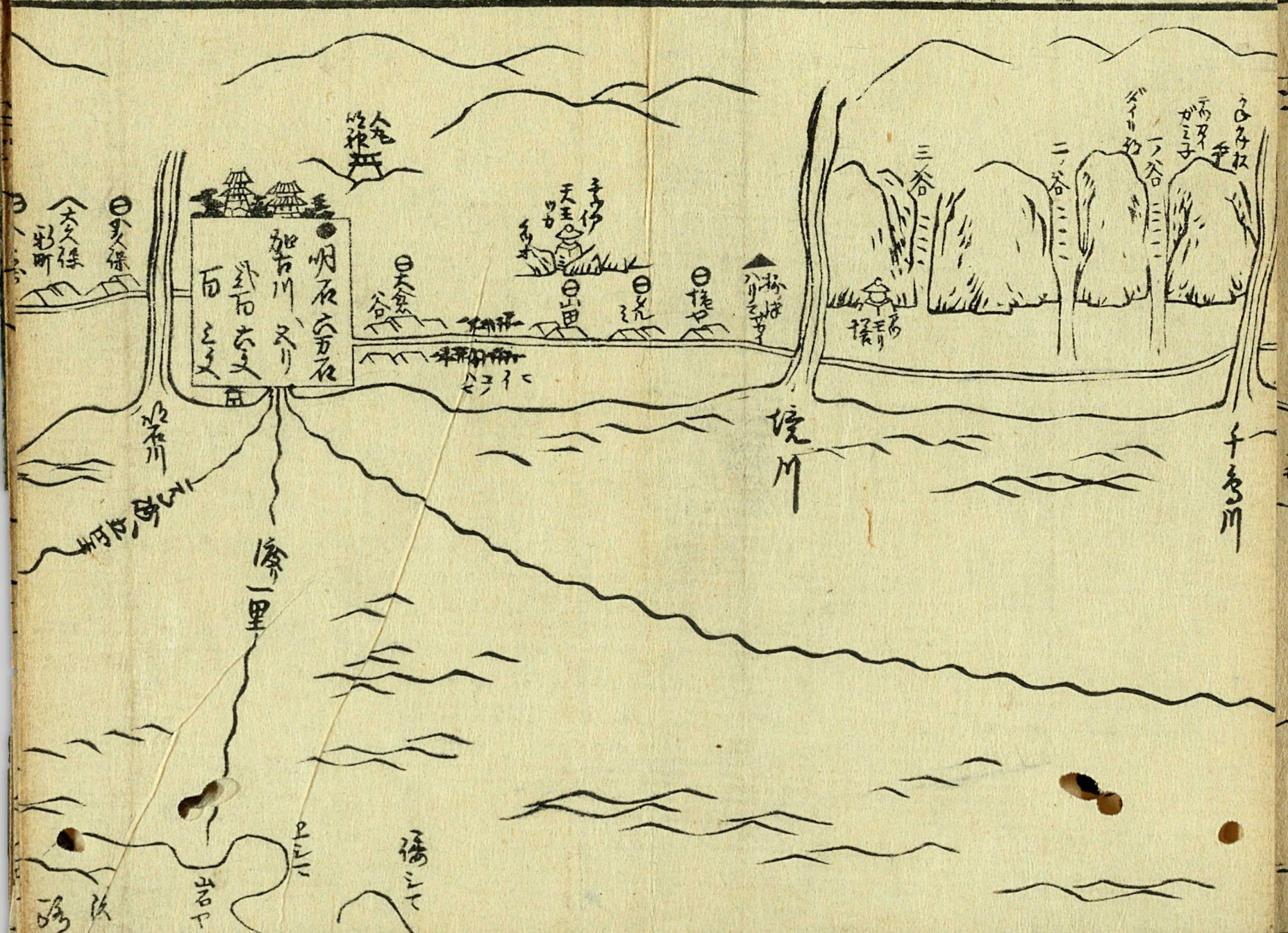
たが橋こりナ双林橋と
西ハ本ろ大坂の賀屋
たろ屋と陸たが橋人
ゆるハまろちり
大坂の左ゆ橋を上下た
川ふ家
ちく人あ 十六文
かり切 十四人あ

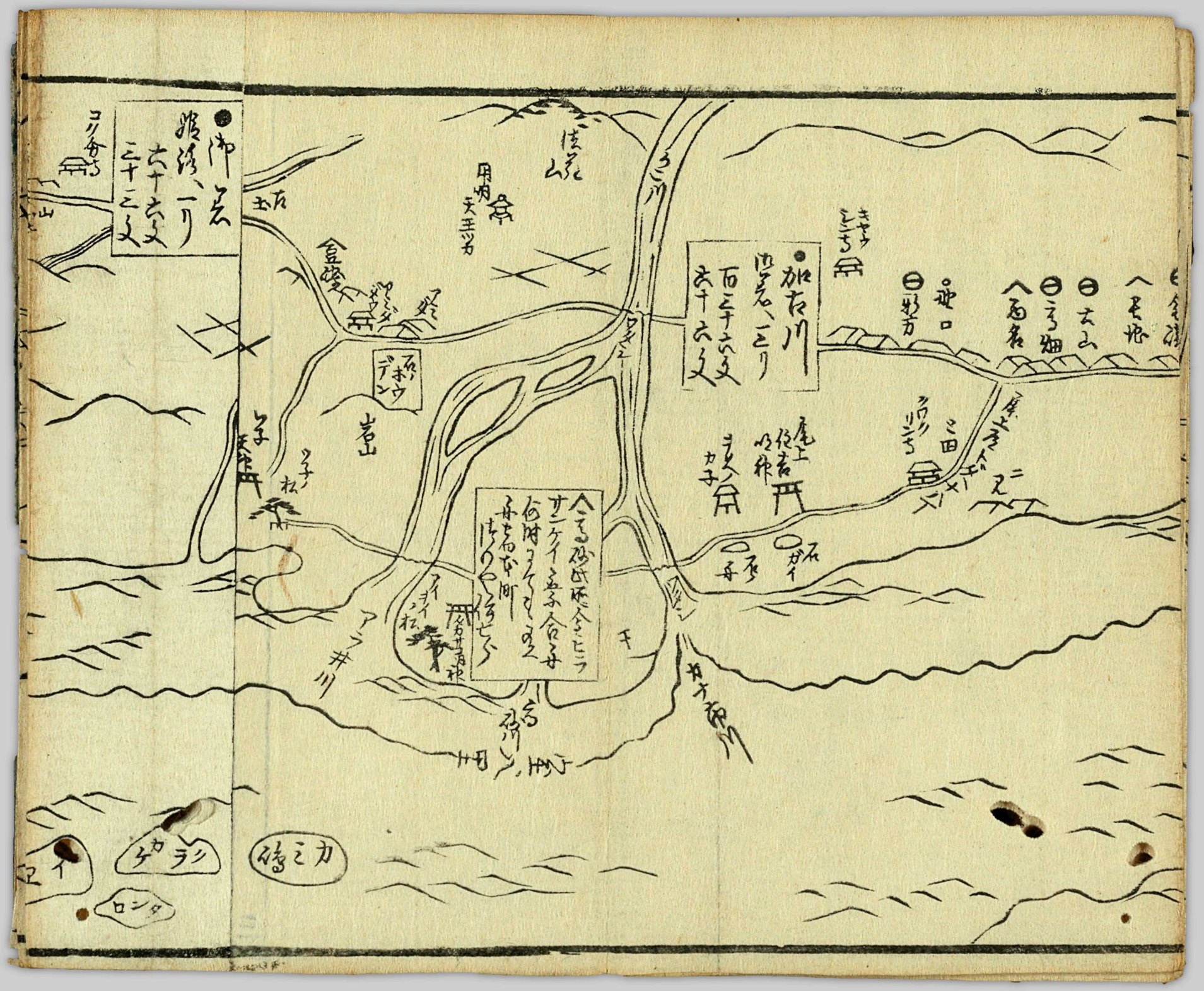
乗船船賃場
大川丁 毎日
毎日や新乗
船屋や船乗
乗や弥乗あ
毎船ごと船代
一乗合六人 指六ゑウ
一日 七人 指ゑウ
一日 八人 指ゑウ
一日九人十人 指ゑウ
一 文 船賃
七八人乗文 廿九ゑウ
但金毘羅より あ廿ん

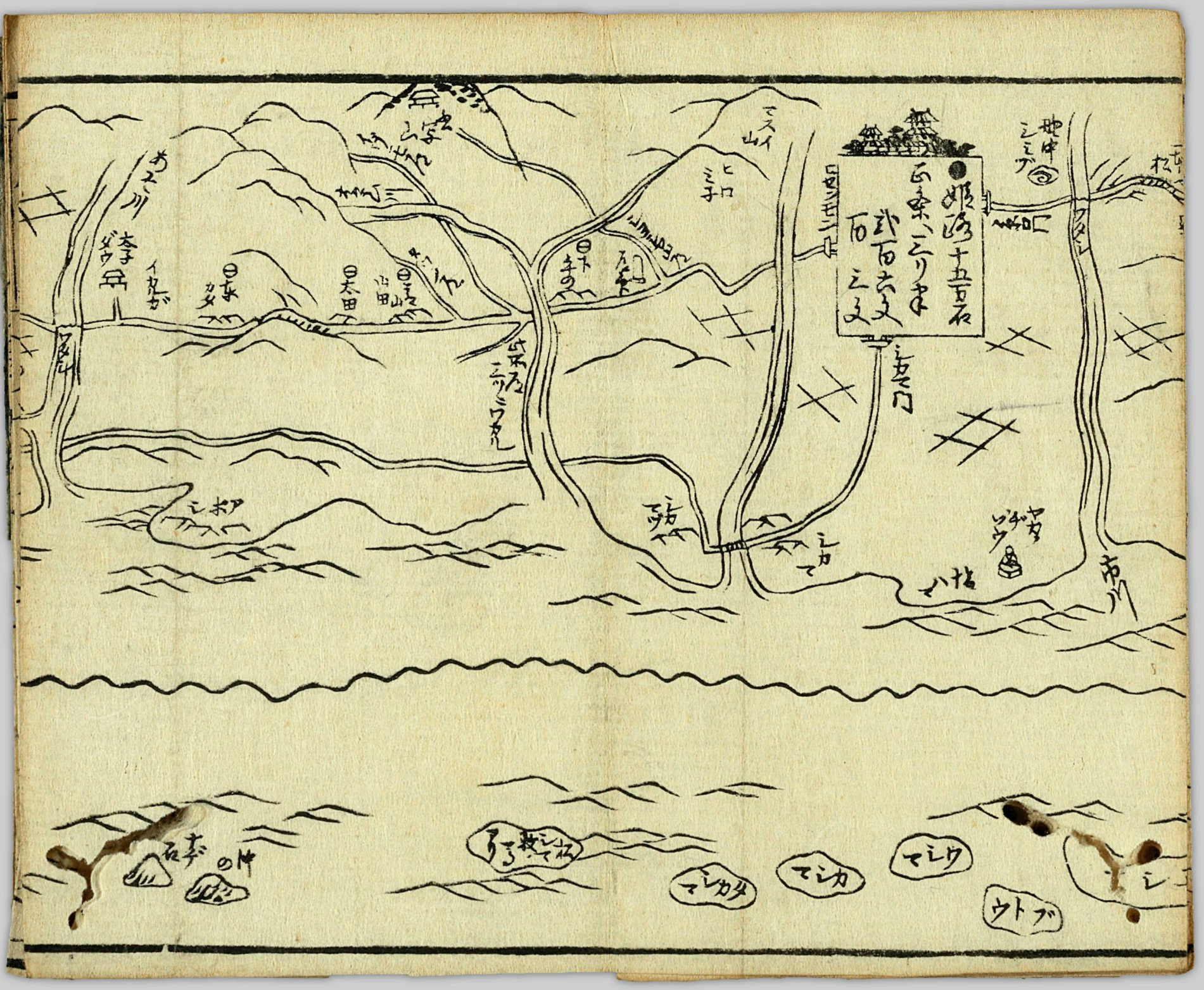

武蔵山
甲山
武蔵山
コトウラ山
ネ松
長師山
六石
今津
陸戸川
松川
ナルヨカサ
武蔵川
西の丸
陸門
ヒガシ
ガキ
川
細ワタシ
田
ワタシ
ワタシ
南
佐
佐
佐

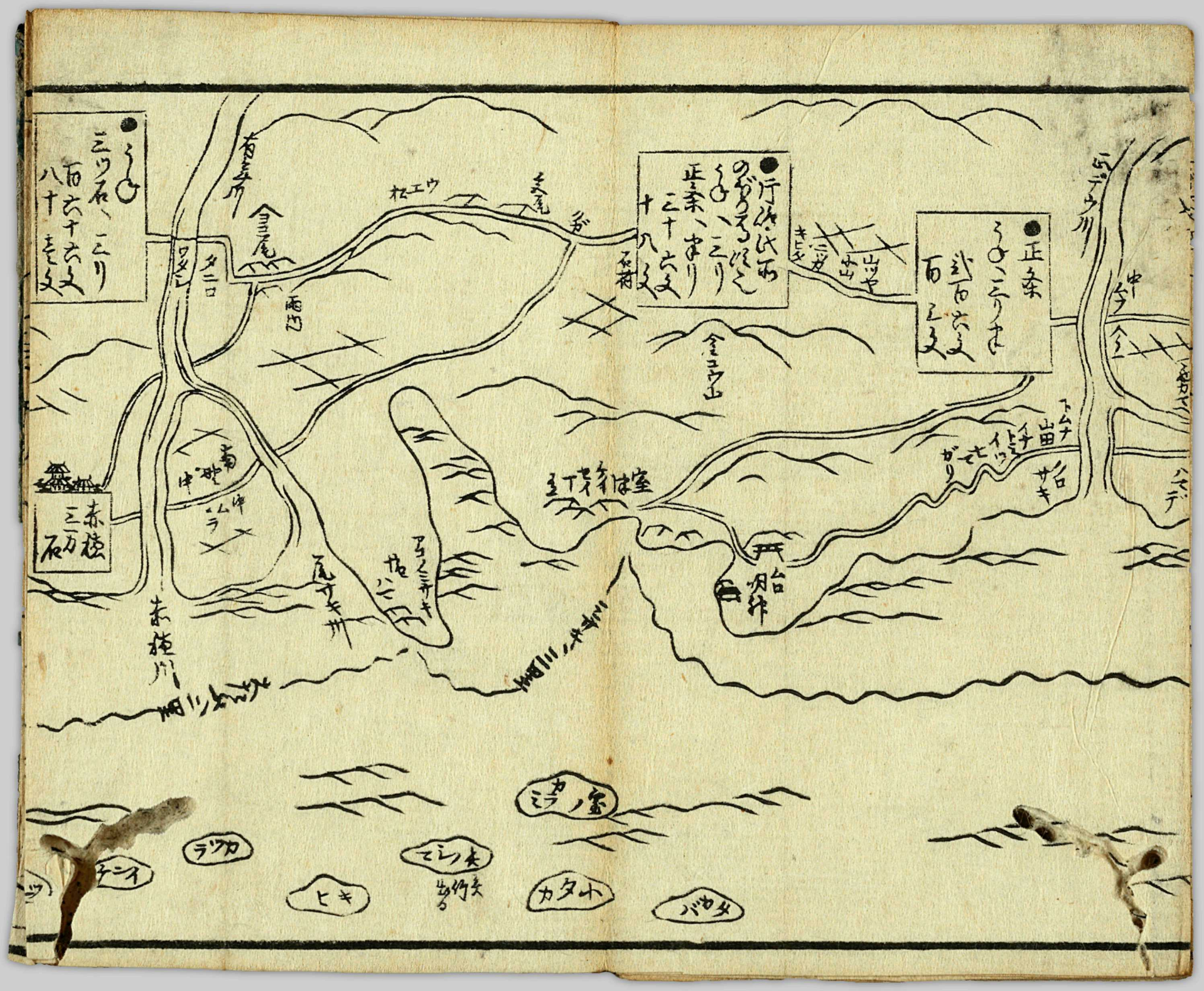
大石川
石や川
佐倉川
石川
寺出川
岩川
森
岩や
大石
東山
みなみ
小山田
仲田
行町
寺出の浦
あや

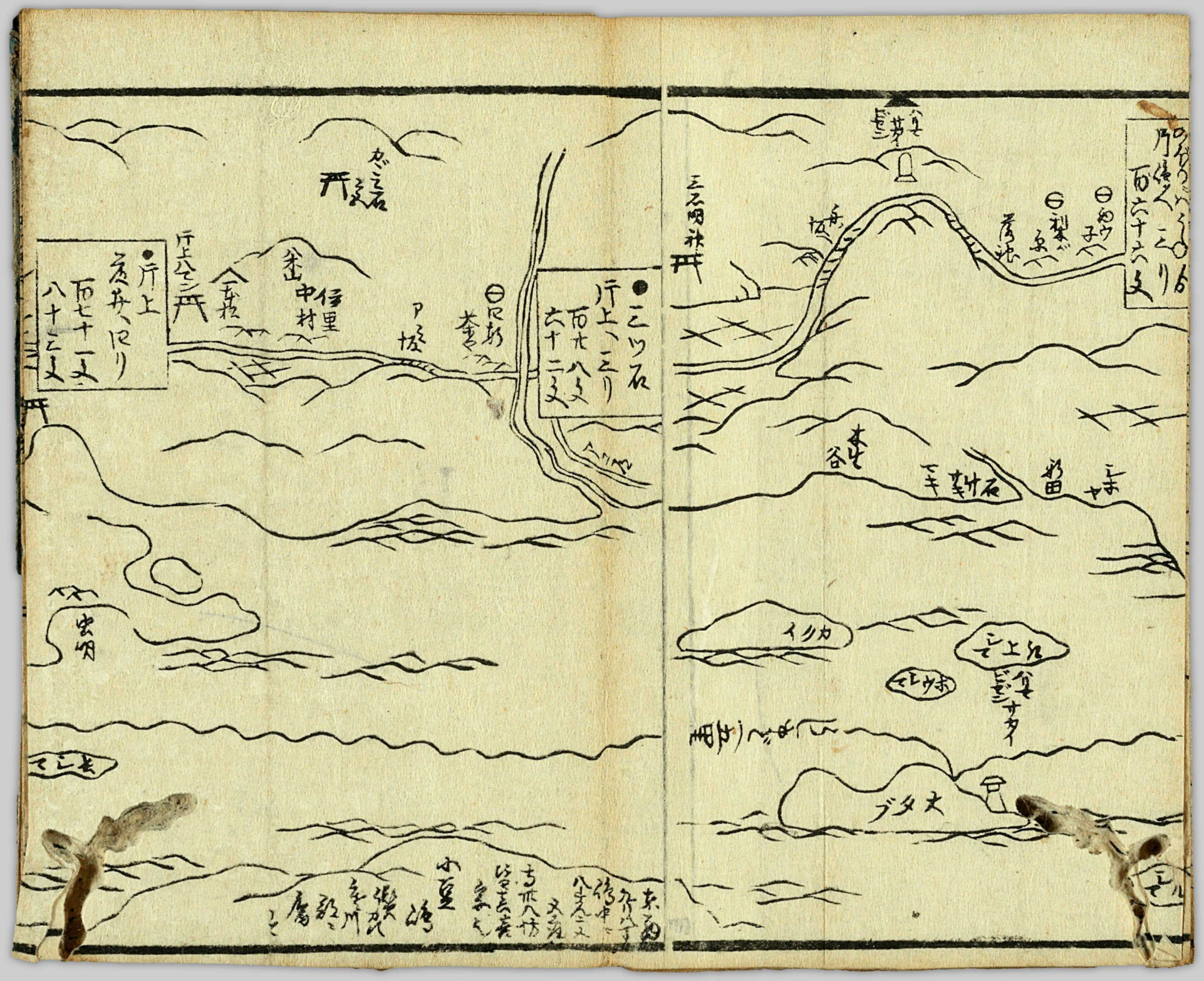

生田川
清川
カルモ川
妙法寺川
天王川
和田城
二ツ茶や
カワベ
キヨモリ

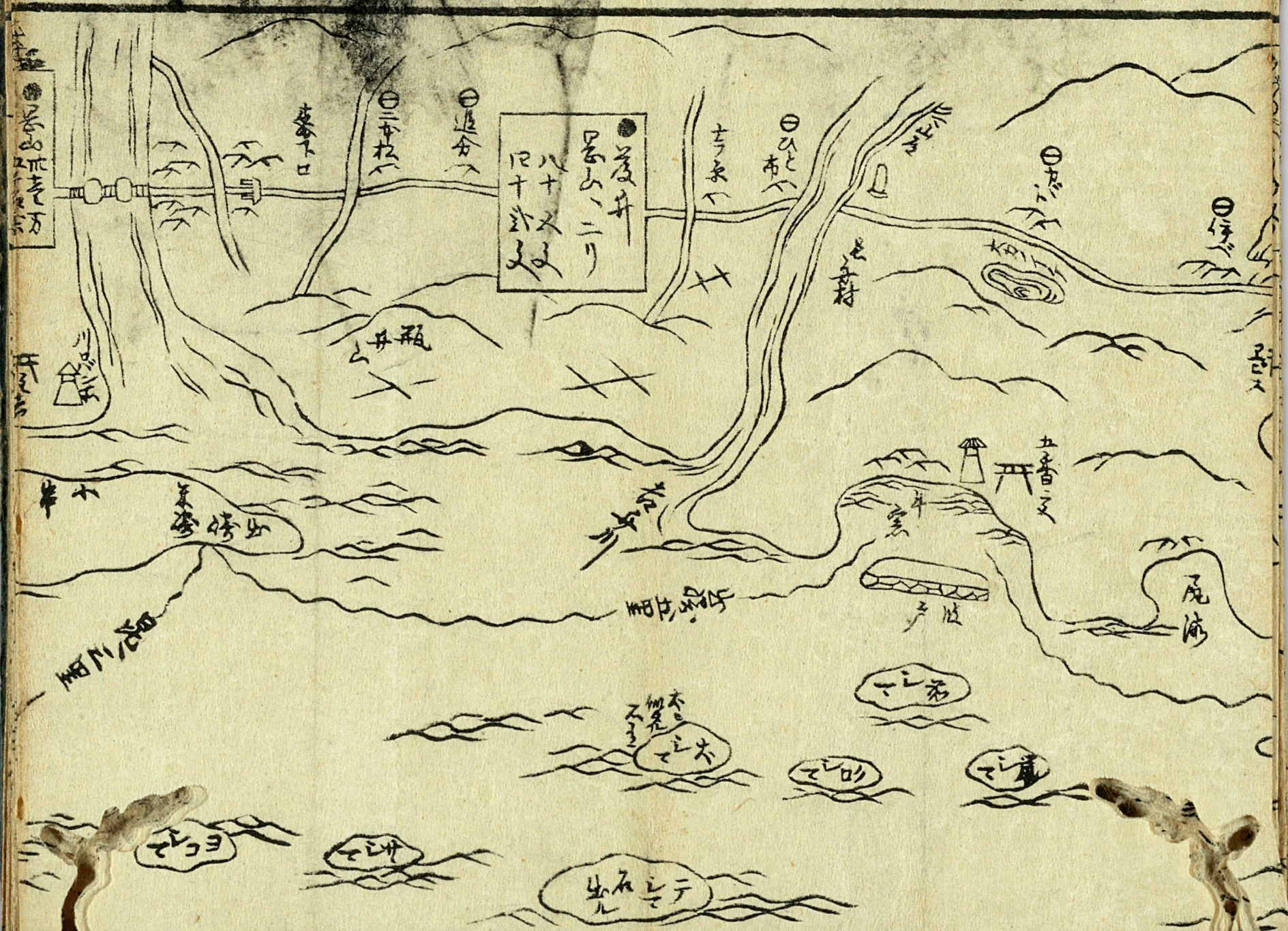

明石六方石
加古川
境川
千鳥川
三谷
二ノ谷
一ノ谷
山田
岩屋
高砂
姫路
二里

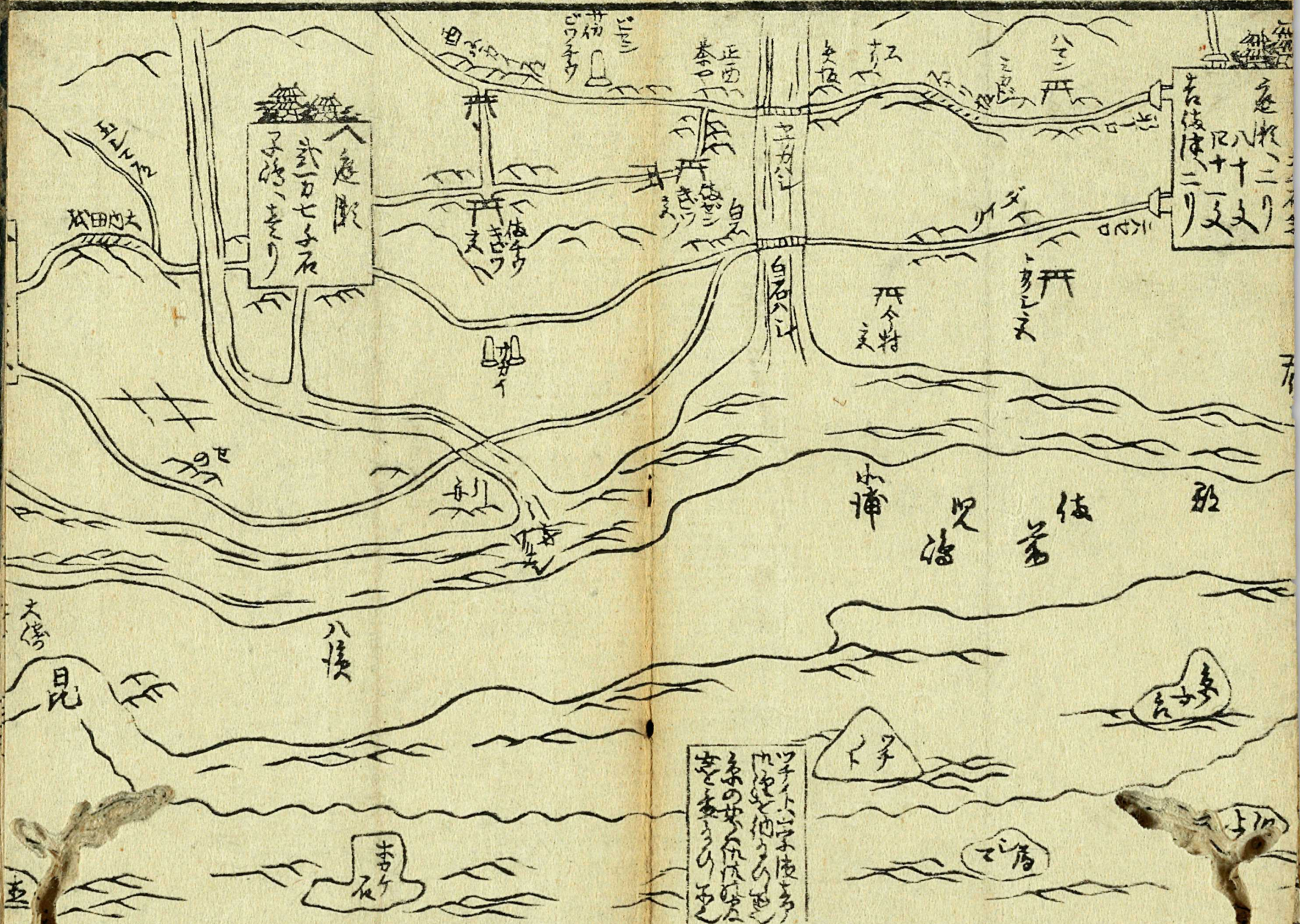

●佐賀
路程、一里
六十六文
二十二文
加布川
百二十六文
六十六文
岩山
アラ井川
ケカラン
ロンタ

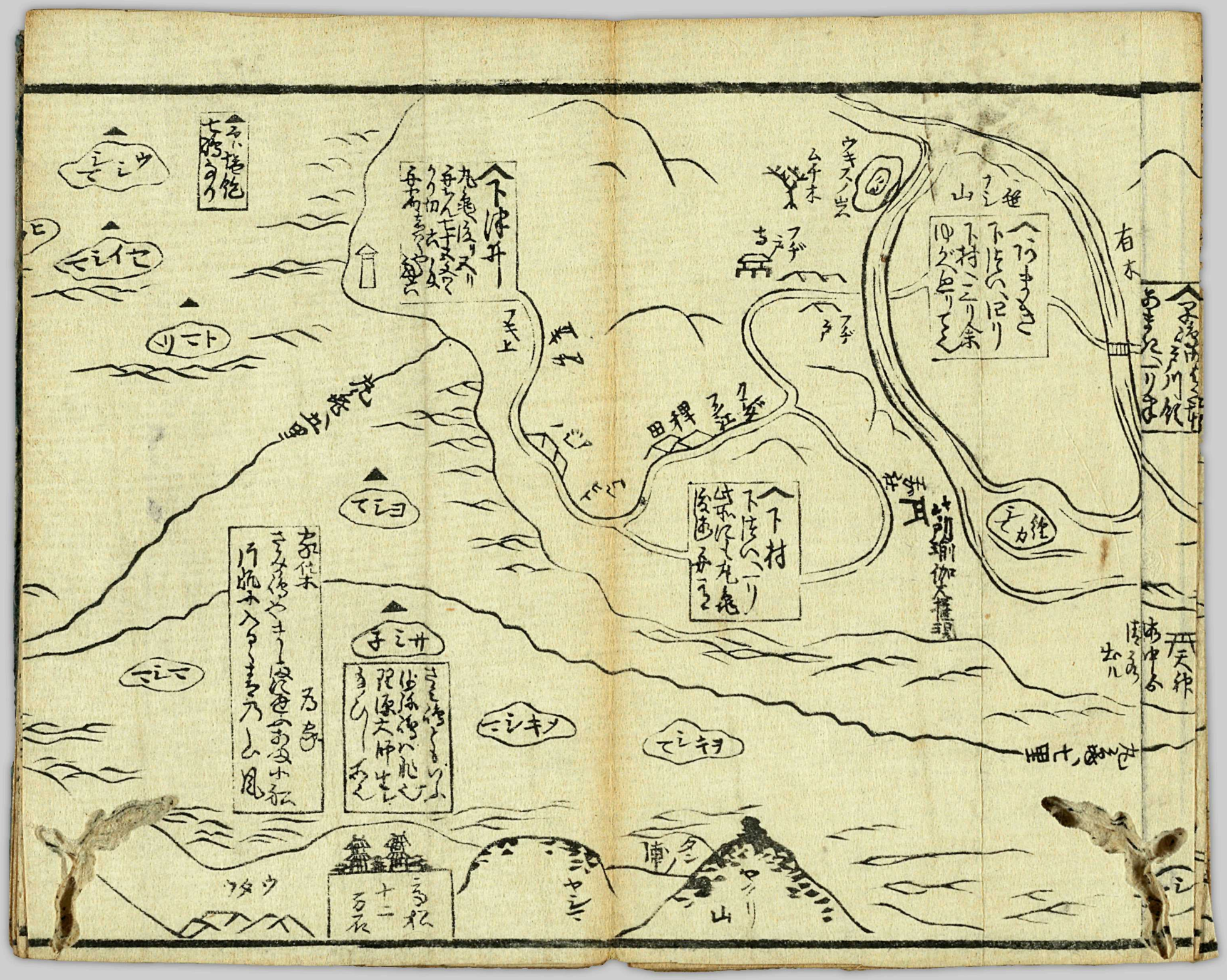

姫路十五万石
武百六文
百六文
ヒロ
ミ子
ウトブ

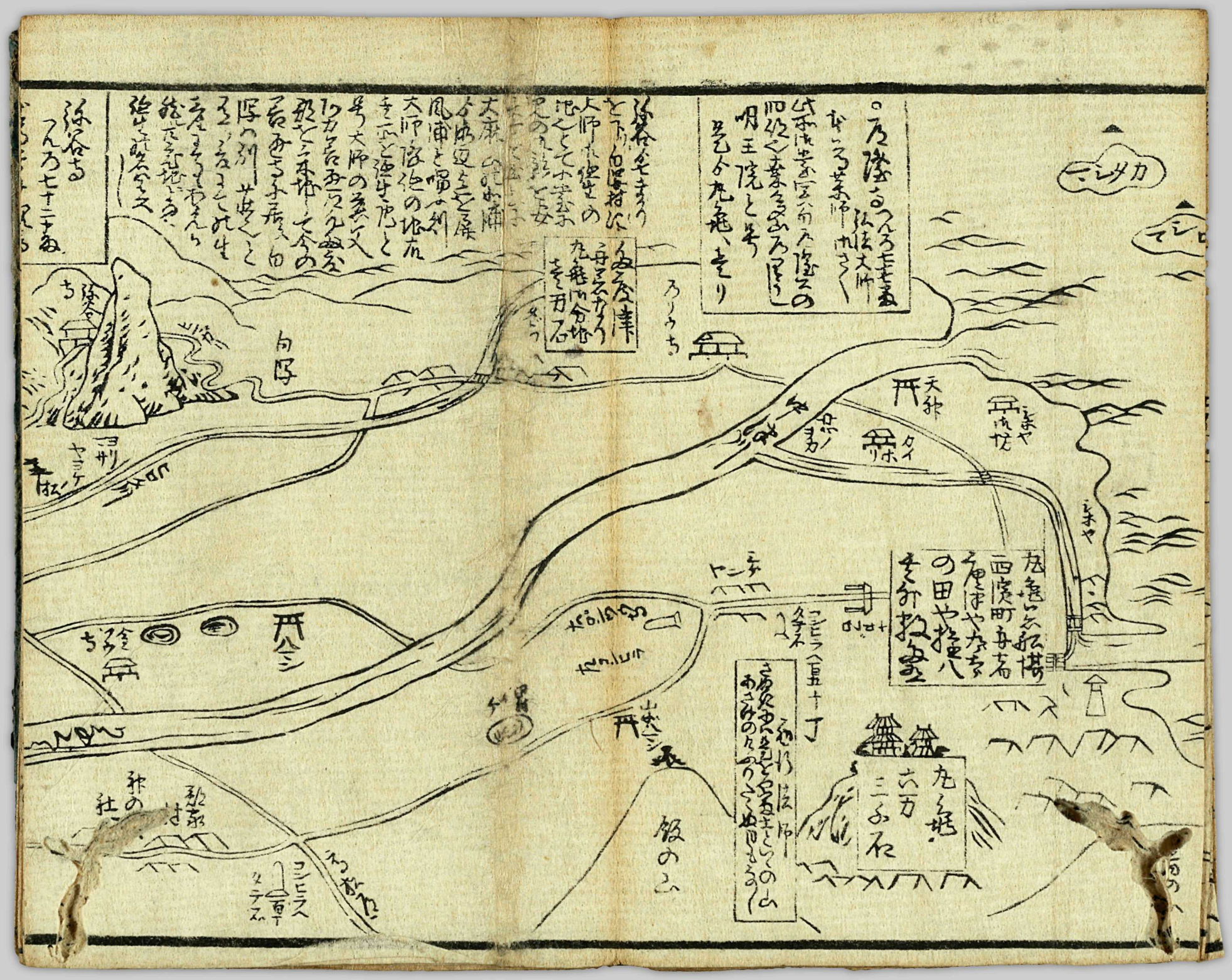

赤穂
三万石
赤穂川
有年川
三尾
西川
松ヒウ
三尾
金ヒウ山
山ヤ
山田
ムラ
ヒキ
カタ小
バカタ
ラツカ
チンイ

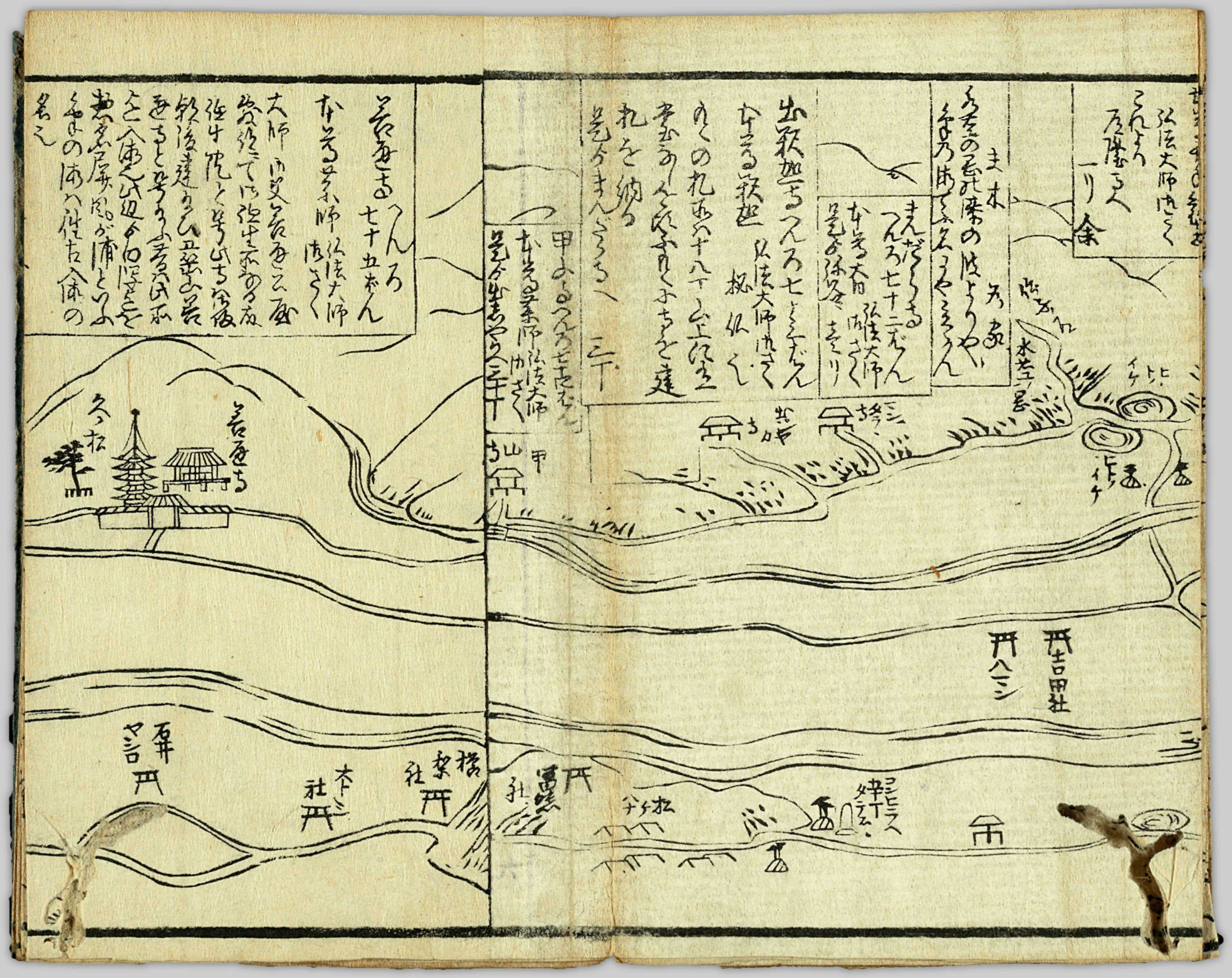

百六十六丈
三石明神
谷
イノカ
ブタ大
百七十一丈
八十二丈
中村
坂
百九十八丈
六十二丈

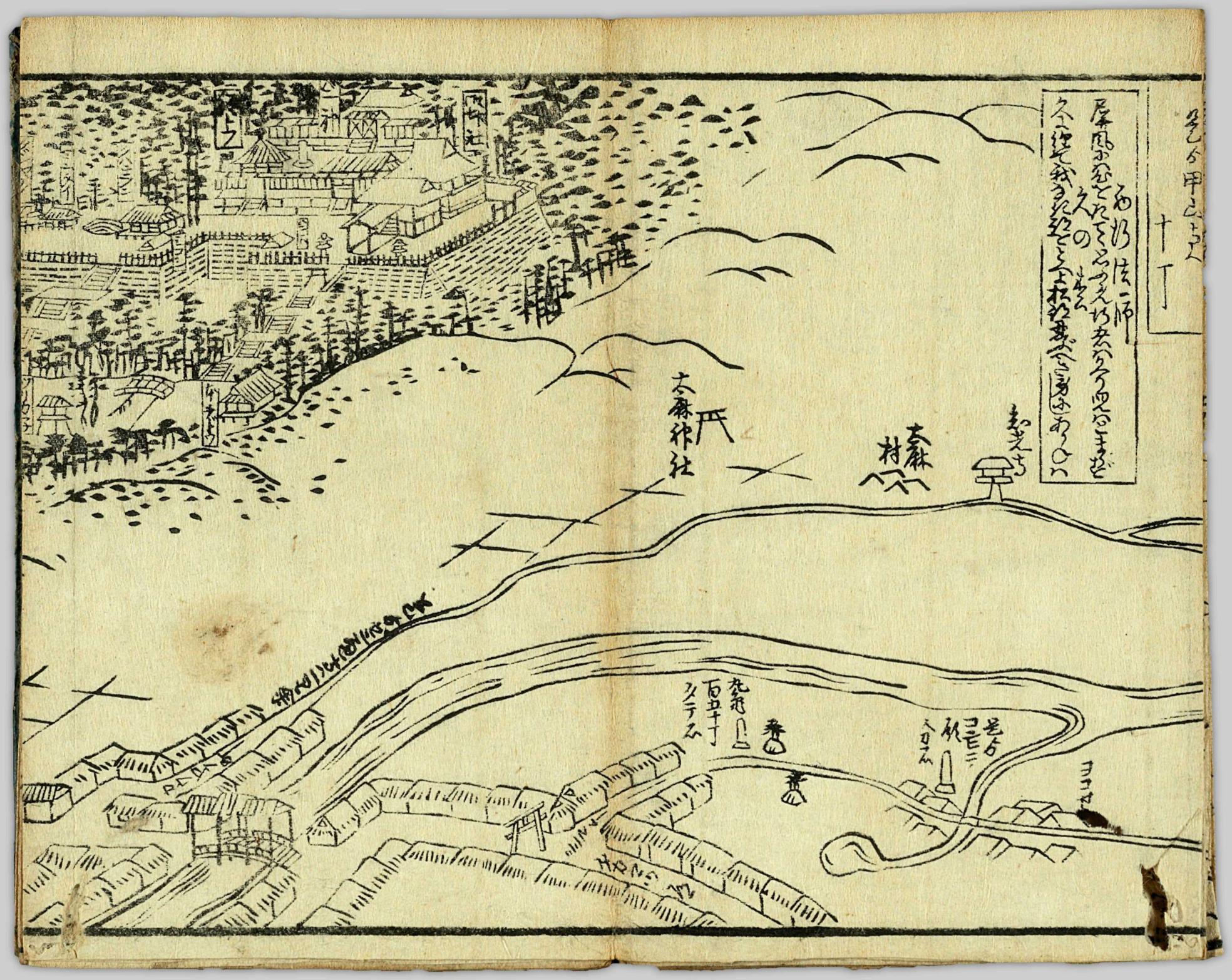

五番
尾滝


武田内大
武田七郎石
八橋
大傳
昆
白石八幡
白石
小浦
伯耆
出雲
石見
隠岐
長門
豊前
肥後


下津井
下村
田稗
山
有木
ウキスノ山
ムチノ木
フジ
フジ
フジ
ツタウ
山
南


カルミ
シロ
ろりうち
向原
天狗
タイ
ヨリ
ヤマヤ
ヤマヤ
ヤマヤ


吉田社
八ヲシ
久ノ松
社
松
社
社
社
社
社
社
社


十丁
大森神社
大森村
九尺
百五十丁
ソノテ

金毘羅
大権現を
祈代に象
取ふれば張弓
時くして神実の
霊験あらたなるをもって
とうの外祈代ようりの
捧るや毎年取人こらようりの
を二人つゝ立て天和年十月十二日
ようゆく成没あ縁を忘病を同
じ日に三豆川奥又海奥より
用蜜蜘蛛あ成合せて勿論
虎ふるを抜かゞ蛇蝎を
はくしみ五年十月の祈りの成
願ふ成ぐくすることの迷年すり

後に此神の大祭礼の日なり

日本書中にて出雲の大社とは云

然たる神史後ごとにとりあつめたる人を

西面小松の庄 苗田橋寺 代に村に教代お續を家の

の者ども是を勤る此神の八月毎月十月後

○出山神社 二百二拾石 出雲の要名を杉尾という

伝く代雲より出る人杉尾氏の子又家号小杉尾やと

名乗者多し 然ども者より神 神号氏雲名

いひ伝へて金毘羅といひ今の世の所は勢橋と

新所という第向く入り彼出りたる松かい石右ハ一の

ちを西向て入る是分神本社を十八丁の熟橋也 拾

三石尾ぶたの屋敷の橋なり 東法石 此波かい石

伊波所という橋を渡り右へたごろの石通ち石右ハ金

山寺所とつかすぐ小彼が系法石之内所という者屋敷

坂ノ上と雲を小坂という代先大さのかまへに右ハ入石之

あこご所という代所かへゆうを雲石という金毘

羅山のち後神住のふ山を麓所こと山之

あこご社之代山ふ者法とて大石にの渡うる

雨乞いうるかんちもかくる 是十月出神の

付山ふ拾うる者をち後神ひろひうる代雨ふく

法ひ石名者金谷へちこびのふとひ伝へ山ハ松

石塔所して石和ど案内なくて石法石かく

大坂之石燈籠一対寄進之銘あれども貴坂の下成
れのまゝといふたりハ谷川町伊勢かいろく氏みちゆ
ゑに坂をすゝるる坂ならん

二王門

門のもとに二坂といふたりの方る坂とうれたあり
門前右側善門院たり側ハ敷地のもふかこ[illegible]
ることよ塀と名づくはかの絵図塀くとこ[illegible]
保阿弥称ふ法か絵ハ老後に出の方に為ぶ[illegible]
あり氏ふ絵ハ[illegible]又武田法か絵ハ御堂実
如尼隆の絵を模して後見ふ下ゐして氏ふ[illegible]
ともいふ尼隆ハ古国加賀に生ハ[illegible]
といふ絵言の塀といふ又絵ふ[illegible]
二王門を入ハ北ハ[illegible]
方後院ハ[illegible]右側吉光院
右側ハ作後院ハ作後院右側ハ作敷ハ[illegible]
たりハ[illegible]右ハ方丈の大門ハ

方丈

象設山松尾寺金光院

院内ふ御[illegible]
[illegible]方丈ハ大門を入ハ[illegible]大玄関右の方御[illegible]
氏ふて内[illegible]

神馬堂

後鳥羽の大寄源ふ[illegible]
氏ふふ[illegible]

く表書院さんの門くたいあれ宮ゟ遷座而さん被成之

宝塔　大日如来

万燈堂　大日如来

二天門　長曽我部元親建立の門くに様ゟ姓名之分
ゟ二天門を入ると向ふ金堂右へ多宝塔みちゝゟ地を
ゝく左側石階ゟ釈迦堂坂くとぐ二ゝ石ゟ右ゟ方
階段堂多宝塔人氏階をつく乞ゟ石階とのゝ乞ゟ
この本ゟ石階を降り表向ふ本地堂

本地堂　不動明王

乞ゟ石階を上ル右の方に堂社之西

役行者尊

大行司社　御ゟる優神くに

多門天
摩利支天　相殿社

かゝのゝ手石階上り御本社くに

御本社　東向に建ゝ

御殿の乃ふ巡りの西ゟ多宝人乞ゟ登り上りて殿
御ゟる右の方石ゟ玉垣の迄ゟの脇を多度津九
亀ゟ沖縄ゟの四階とゝ御中渡波宮さとゝ

飯の山氏所なる山氏姿一入よく絶系いと年の久沙の
院別くよりの方々の協和なる所なる山寺形式
形の人代数所入まべ御内陣今御金幣と出さんいてでり
ヒくく本寺脈科指式まま寺脈八古々寺脈科八出く
内ちの人指系して御札落又形形のくく優麿山脈
清を形の山清寺所人中入ニ尼の優麿科金百まより
限くこの寺山後清のくく優麿乃御札出る

三番禮堂

少石清をより塔の内ニ若小清屋のこ代清
屋の寺山本社山内清迎ーー聞ニ清むべーー

經堂

大寺源少羽形寺山寺附ヲて大明板の一切
御ニ御堂右の方ニかくこの代保ニ一切御清朱寺
附乃紹介

觀音堂

御本尊ニ山新寺の尊像弘法大師山脈
代後堂八金剛坊尊師とやまりて高山中院乃
山清ニ桂化寺摂小清りく高山の寺優神
と代のこ人尼験ありこの代尊像ニ
高新形ニて系寺院する八山本社小鈴ニ八ゆ
さまで代紀寺堂ニて尼験ニ後ニ彫ニ
代堂小かけさとる指ニの内ニ稼賀古法服のこと
土佐光信の祇園を舎の器と大後る式校ニ

紀寺堂が素盞嗚尊に直授の毎年三月十五日と
三千度の護摩の中に十月八日山中人一夜の護摩
十日十一日山神に奉る十二日山神樂を奉るなり他の神
もとかりの山ごもりしといふなりとなく神樂者
ようかの出でしは紀寺堂にて三月十五日と
ごとくごとくとりといふ支より紀寺堂に神樂式
を人神役に当りしあり改人改宗僧侶三人三宮ござ
あるて猪ふとるれ式のごとく後に猪奥と言ふく
堂の掾より延へなげすて若を代堂池人猪る色
山神にの後りく山神にの後れ後人みかく
下山してを後人の勿論寺中の僧侶ともに後い
きを人と宮山ごもり代若をひとへに幸後のごとく
聖ごの教を後してかくとも猪ちを猪奥
かしもの若へを後ふの別若食谷人寺後神
のをとびのを後の若食谷の寺号若食寺
といふ別若人食寺色例年れ色りの若をとび
もを色ごの役若者の山ごの役れ若食谷と若をとび
のへいるの山神後りを後古の毎年かくのごと
若の物の山神にの羅をの若人山神若人の
物ざるの年中にごと一夜代夜年をを食を
をを後をを後後の幸かし

千躰佛堂

孔雀明王堂

竹籠所　高山の西院を系蓋の西へ

神樂堂　紀吉堂の前ふの見分紀吉坂石階をさがり中段たり例の小祠を山祇と

山神社　大黒天と毘沙門の天といふ

代ふより右の方細ふ道を八金堂へ出る

金堂　師本尊薬師如来紀剛三丹寺北面基

紀僧大師代ふて七仏薬師の法を修しまつりと

見えより二天門、ちり塔の左へ下る

る松、永を隔てさて金鬼殿山を

陰地のるを来法西源寺

る松分屋敷人　去宝寺

屋敷寺　山田新屋敷の山ことに

巳西国第八十巳番の札所

本尊ふ紀吉坐像　内陣三天

内裏源と壇の浦こいふ　仏法大師出仏

入海小松沢ふ市弱五石行の石垣

ちりの沢屋敷ふすこ来るの沼陸来

二丁対双方へ分

於沢大市新三郎付手取立方の女房五丸茶の跡

附ふ茶の跡を紀をとちらこれ人の神閉ふりこ〇〇

ある人
屋敷の傳のこうとして板のうしろに立てたる市ごうときく

閑徳堂　屋敷にふたしこの法師にして願信対死とつ
かまる公叙者弘法大師御作

熱門の法　佐渡願信石碑
源義仲の家臣の者共の墓

五代後小松院御宇永徳元年四月廿日奥尻の住人佐渡の一門
佐竹とつかまる屋敷堂の傳に基り次信の石塔に向ひ法弘て
ものぐるる

鍛冶や石工食をつたえの者しの石に書ころもこの
佐竹一族石塔の造りたるもの石に書ころ中に
塔むしろとうと今ということ多く拾ること是こうた仏

屋敷の八栗へ　三拾丁

八栗寺　弘法年往村に上れる
八十丈巻の札所

本尊十一面観音立像　作者人　丈六
弘法大師作

八栗の山上に度へ　寺屋寺

志度寺　弘法年往村に上れる
八十六巻の札所

本尊十一面観音立像　作者丈六二寸
弘法作

志度の浦　屋敷堂

ちかみちて海のかとそこ屋敷の入口くの松れむ
佐竹八郎基幸此所にすこう
新浜　西白不者の出船くれ上こう張く
出船ともこの出船ともこの作

三文字
出の浦こうれか海の沒れ中ふ多くこうする田こ屋敷を明かう
長望
出大民

志度寺仏像

佛生山

本尊阿弥陀如来　三百石

法然上人ゆかりの寺　寺領

高野山ゆかりの寺　弘法大師開基

法然上人流罪の時　建立

近隣より寄進　寺中本堂

あり法然上人　建立

延宝三年住持の僧　永代業務を勤仕

佛生山金毘羅宮

白峯、崇徳天皇の霊　文星

田村の神　讃岐国一の天満宮

一ノ宮

圓命寺

本尊阿弥陀如来像　地天三天

弘法大師　地位

白峯寺

本尊阿弥陀如来像　地天一天六天

弘法大師　地位

文星

八十　寺領の札所

神仏を除外の上に造り　古今氏関係ある人々

対馬の国に為地　地天一天三天　位に神仏

なりとなし　神仏

本尊三天　地天三天

弘法大師　地位

一の宮金毘羅宮　文星

阿弥陀

八十　寺領札所

本尊阿弥陀如来像　地天一天六天

弘法大師　地位

文星

八十　寺領の札所

御本社中禁徳院　右相模坊

弘法大師出生

陵の西本社の後口に立

御門の額　左大臣判官為義の像

右　張面八面　為朝の像

禁徳院七十六代保元元年崩御、遷流のゆえ出家仏法相の
御事ふ三年又敵ゴ居に移り、もう六年ゆえ九年に
して七十八代二条院に御譲り寛元二年八月廿六日出家御
年四十六歳　崩御ゆえ禁徳院と申す　八十代天皇院の御宇安元元年七月廿七日禁徳院と
遷号申す　氏寺を松山の御願とゆえ仁安元年神無月
の頃西行法師松山に御籠り遠上れ籠りまう
よせうけ法師しまる付御願所にして

松山の法流れくうの世でこそ尋ねゆくかな
く御願中ようの人これ西行法を流して
ようや若むしのむ乃ゆえそもかくうん後に行ようん
氏は稀かりしてこそ西行石とゆみあり

松山

彩古今雜中　　二条院隠岐

ものうくて程経る代と松山のまつもまゆ年ゆ見れる

児が嶽

白峯の山中に立
百余丈の巨嶽なり

天皇の御子氏嶽なり児如沢とこそ児八幡宮御神
なりと後宮宮なれ記にてこそ奥義宮に奥乃
天皇の法孫にして日本武尊の御子より列聖乃天皇の御
宮殿故ゆえと流メのゆ山の奥宮天皇ともなり

映書谷　白峯のふもとにあり

弘法大師童蒙を導く窟なり　此の外伝播多し

こゝを以て略せしめ　くわしくは今人伝て映書谷にあり

白峯の金毘羅　又宮

こゝに金毘羅を安置せり　此宮北丁

讃岐名所記上

金毘羅大権現の御利生は地に異なりて霊験の及ぶ所高し　中古人結び弘法の跡を慕へり

信仏堅固の人多くは御作仏を拝し奉り

家々に仏殿を建立し　仏宝を崇め

御祈願を致す者多し　此故に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遊をもとにして始くこの書をなすべしとのことなり

安永七戊戌二月　坂陽住　今村美景謹書

金毘羅桑詣海陸記　大尾

大坂書林

木挽町中之町
長文字屋市兵衛
心斎橋筋順慶町
柳原屋与兵衛